

# 神奈川県内の「やぐら」集成（2）

## －上行寺東遺跡と六浦周辺のやぐら群－

中世研究プロジェクトチーム

### はじめに

昨年度実施した、発掘調査が行われたやぐらの集成をふまえ、今年度から個々の事例について検討を行う。やぐらの分布の中心地は言うまでもなく鎌倉であるが、鎌倉の外港として機能した六浦の周辺にも数多くのやぐら群が存在する。現在の行政区画で言うと、横浜市金沢区六浦、瀬戸、釜利谷付近が分布の中心となっており、発掘調査が行われた遺跡もこの地域に集中している。特に上行寺東やぐら群の報告書が2002年に刊行され、資料数が一気に増加した。そこで今年は上行寺東やぐら群を中心として、横浜市南部地域のやぐら群について分布、形態、出土遺物から検討を行うこととする。

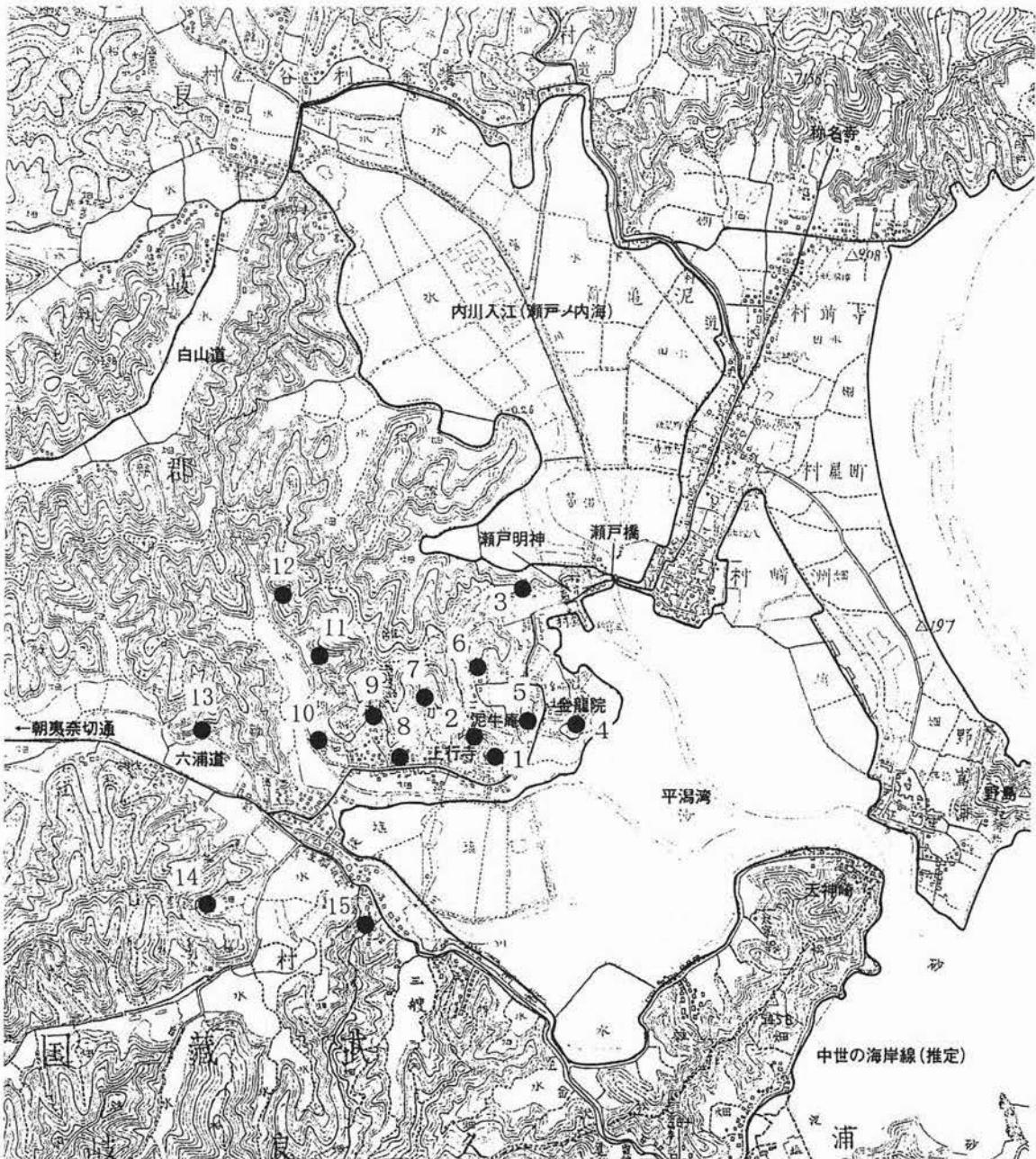
### I. 上行寺東やぐら群周辺の歴史的環境

#### （1）六浦庄の歴史

上行寺やぐら群が所在する六浦庄は、武藏国久良岐郡に属し、ほぼ現在の横浜市金沢区一帯にあたる。中世以前の六浦庄は、『和名類聚抄』によると古代の律令制下において武藏国久良郡鮎浦（ふくら）郷と言われており、古代末期には常陸北部の豪族である那珂氏が領有していた（金沢区2001）。しかし、鎌倉時代以前には「六浦」の状況を示す資料はほとんど残されていない。

中世に入ると、六浦庄は鎌倉幕府創業の有力御家人である和田義盛の支配となった。『吾妻鏡』建久三年（1192）二月廿四日の条には、平家の武将上総五郎兵衛尉忠光が、和田義盛により「武藏国六連海辺」で切られたと記している。建暦三年（1213）五月には、和田義盛が執権北条氏により滅ぼされた和田合戦に際して、和田方についた「六浦三郎 同平三 同六郎 同七郎」等の名が記されている。和田氏と六浦庄の関係を示すものとしては、大道小学校裏手の谷戸を「和田の谷戸」と呼ぶこと、また六浦庄内には数ヶ所の「和田」の地名が残されている。確証はないものの、鎌倉市内に所在する杉本の他を、和田義盛の父であり杉本を名字としている杉本太郎義宗が領していたと考えられていることから、和田一族が六浦から鎌倉へ通じる六浦の地を領有していた可能性が高いものと考えられる（石井1986b）。また、六浦と杉本を結ぶ朝夷奈切通は、和田義盛の子朝夷奈三郎義秀が、一夜にして切り開いたと伝えられていることも注目される。朝夷奈切通は、六浦の南を通る六浦道の途中に位置する。上総国夷隅郡から安房国朝夷郡付近を支配地としていた和田氏が、房総方面から鎌倉へ入るときに最短の経路として朝比奈切通を利用したものと考えられる。朝夷奈切通については、仁治元年（1240）十一月卅日の条に「鎌倉与六浦之中間始可不当道路之由有議定 今日曳縄打丈尺 被配分御家人 明春三月以後可造之由被仰付云々」がある。また翌仁治二年四月五日の条には、「六浦道被造始」とあり、開削が始まったことが記されている。さらに、同年三代執権北条泰時が現場へ足を運んだことも記されている。このことから、朝夷奈義秀の開削した切通はそれほど大規模なものではなく、『吾妻鏡』の記事は既にあった切通の大規模な改修と考えることもできる（石井1986b）。

一方六浦から鎌倉に至る道は、六浦道のほかに白山道があげられる。白山道は、釜利谷と鎌倉を結ぶ道で



1. 上行寺東やぐら群
2. 上行寺やぐら群
3. 上行寺裏遺跡（瀬戸21番地やぐら群）
4. 金龍院（瀬戸町）やぐら群
5. 泥牛庵脇やぐら群
6. 能仁寺跡（お屋敷）やぐら群
7. 嶺松寺跡やぐら群
8. 岩松家裏・渡辺家墓地やぐら群
9. お伊勢山やぐら群
10. 長生寺やぐら群
- 11-12. 西ヶ谷戸A・Bやぐら群
13. 六浦大道やぐら群
14. 六浦北部遺跡
15. 六浦三艘地区やぐら群

第1図 六浦周辺の旧地形および周辺のやぐら [S = 1/20000]

朝東奈切通の開通以前には盛んに利用されていた。白山道の開道した年代は明らかではないが、六浦庄の領主北条実泰が、釜利谷に居館を構えたのが元仁元年(1224)と推定されているので、このころまでには開通していたものと考えられる。白山の呼称は、釜利谷に白山権現が勧請されたことによる(武部・近江屋1987)。

和田合戦以降の六浦庄は、二代執権北条義時の子実泰の所領となり、以後実時-顕時-貞顕-貞将と金沢北条氏により相伝される。六浦庄は六浦本郷、釜利谷郷、金沢郷、富岡郷4つの郷に区分されていた(岡崎他1982)。中心となるのは六浦本郷で、大道から瀬戸神社までの一带とされる。釜利谷郷は、古道である白山道

が通じていた。金沢郷は、称名寺金沢文庫を開いた北条実時とその子孫が本拠としていた。富岡郷は、一時期有力御家人である安達氏か名越北条氏が本拠にしていたと言われている。このように、各郷共に鎌倉幕府と密接な関係が考えられる。鎌倉末期の資料の中には、「相州六連(浦)」と記されているものも見られる。これは、六浦庄が武藏国と相模国の国境を隔てながらも、鎌倉ひいては北条氏と密接な関係を持った地域であったためにこのような表現が用いられたものであり、六浦が政治的な領域に取り込まれて、鎌倉と一体化して支配が行われていたためと考えられている。一方、鎌倉には大船が停泊できる港が存在していないため、六浦一帯が鎌倉の外港として繁栄していくこととなり、北条氏にとっては三浦半島に勢力を残す三浦氏への牽制と、房総に勢力を張る千葉氏への連絡路を確保する(竹内他編1991)という意味も含まれていたものと考えられる。宝治元年(1247)に三浦氏が滅亡すると、六浦は鎌倉の東を守る軍事的拠点という性格から、貿易港・泊地・避難港という本来の港湾施設としての機能が前面に出てきたものと考えられる(竹内他編1991)。しだいに、経済や文化の面からも、六浦の地が重要視されるようになっていったのであろう。

一方中世では、平潟湾に面した瀬戸神社が重要な役割を占めるようになった。瀬戸神社は近世まで瀬戸明神もしくは瀬戸三島明神と呼ばれ、治承四年(1180)源頼朝が伊豆の三島明神(三島大社)を勧請したのが始まりとされる。頼朝による勧請については確かな記録はないが、三島明神は海上の神としての性格をもっており、近世以前の平潟湾及び六浦周辺の地形的状況を見れば、瀬戸神社が沿岸一体の守護として祀られたものと考えられる。近世の大規模干拓がなされる以前は、洲崎と瀬戸の間が海峡となり、その北側に広大な内海が広がっていた。瀬戸神社はこの海峡から洲崎、金沢方面および内海を望む地に置かれている。14世紀初頭には、鎌倉幕府の主導によって瀬戸橋が通された。これによって、洲崎と瀬戸は陸続きとなり、洲崎～瀬戸～六浦を経て鎌倉へ出るルートが確立された。

鎌倉幕府滅亡後、六浦庄は足利直義の腹心上杉重能に、富岡郷は同じく仁木義長の支配地となった。その後、足利尊氏・直義による室町幕府の内部分裂をへて一時期上杉氏の支配から離れたが、貞治五年(1366)には鎌倉公方足利基氏により再び上杉氏に支配権が与えられている。

永享十年(1438)永享の乱により鎌倉府が滅亡して鎌倉が衰退すると、密接な関係にある六浦庄の港湾都市としての機能は低下していったものと考えられる。さらに、関東が小田原後北条氏の支配下に置かれると、六浦庄もその配下に与えられた。永祿二年(1559)年に成立した『北条氏所領役帳』には、富岡は玉縄衆の関新次郎、釜利谷は江戸衆の伊丹右衛門大夫、六浦木曾分は江戸衆の武田殿、金沢称名寺分は北条氏綱の弟幻庵が領有し、その他に称名寺・龍源寺の寺領、瀬戸神社の社領などが存在していた。しかし、天正十八年(1590)に後北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされると、中世港湾都市としての六浦庄も終わりを告げたと考えられる。

近世以降の六浦は、江戸湾岸の物流の拠点としての性格が強まってゆく。また「金沢八景」として景勝の地としても知られるようになった。さらに、新田開発に伴って、六浦の景観も大きく変わっていった。寛文八年(1668)に平潟湾の一部が埋め立てられたのをはじめとして、内川入江や平潟湾は江戸時代を通して新田開発がなされて行った。なお、享保七年(1722)には米倉氏が金沢を領有し金沢藩が成立している。

## (2) 上行寺やぐら群と周辺のやぐら

ここでは上行寺やぐら群および上行寺東やぐら群と、周辺のやぐらについてみてみたい。

まず、周辺に多くのやぐらが存在する上行寺について述べておきたい。上行寺は日蓮宗六浦山上行寺と号する。応安三年(1370)頃に、六浦湊の六浦景光が、下総中山法華経寺三世の日祐に帰依して建立したとされる。日祐は、千葉宗胤の孫胤貞の子とされる。開基は荒井平次郎光吉で、瀬戸の金竜院近くの荒井という地



第2図 上行寺東やぐら群遺構配置 [S=1/600]

に屋敷があったという。六浦湊を支配する財力豊かな豪族的な商人で、出家してからは六浦妙法とか日荷上人と呼ばれている。寺伝によると、前身は真言宗の金勝寺であったとしている。日蓮宗に改宗したのは、いわゆる「船中問答」がきっかけといわれる。下総の豪族・富木常忍が、同地から鎌倉への途中、たまたま六浦まで同船した日蓮上人と法論をたたかわした。結果は、常忍が屈し日蓮上人に帰依したという。常忍は、のちに日蓮宗大本山・中山法華経寺の開基となった人である。

次に、周辺のやぐら群について述べてみたい。

**1.上行寺東やぐら群** 横浜市金沢区六浦2丁目に位置し、昭和59年(1984)8月～12月及び昭和61年(1986)7月～12月の2ヶ年にわたって発掘調査が実施された。上行寺東やぐら群は、『鎌倉市史考古編』に「六浦ガード付近やぐら群」として知られていた。発掘調査によって、2段の平場と44基のやぐら、10棟の掘立柱建物址や礎石建物址などが発見された。このうち上段の平場には2棟の掘立柱建物と池状遺構が存在し、阿弥陀如来像や五輪塔が刻まれたものを含む5基のやぐらに囲まれている(小林他2002)。やぐら群とその前面の施設が一体となって発見された希有な例である。この上段平場は数基のやぐらと共に移設復元され、現在も遺跡の一端を垣間見ることが出来る。やぐらの構築から機能していた時期は、出土遺物等から14世紀中頃から15世紀中頃の約100年間であると報告されている。

平成8年(1996)には、上行寺境内西側の墓地内で2基のやぐらと、やぐら前面では建物址の一部が調査されている(宗臺・宗臺1998a)。やぐらには、擂鉢状ピットが穿たれており14世紀以降に手が加えられたと報告されている。

**2.上行寺やぐら群** 上行寺が位置する谷に6箇所のやぐら群、計31基が存在する。『鎌倉市史考古編』に「横浜市金沢区六浦上行寺境内墓地にやぐら群があるが特記するほどのものはない。多くは墓穴に利用され

ている。五輪塔地輪に『石□□□□永徳二二八月』ときざむものがある」とされている。やぐらは、本堂の東側に3基、残りは本堂西側の丘陵部分で確認されている。

**3. 上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)** 上行寺東やぐら群の存在する丘陵の北西部分に位置する。平成13年(2001)に大小6基のやぐらが調査されたが、後世の改変が著しい(宮坂・鈴木2001)。

**4. 金龍院(瀬戸町)やぐら群** 開山は方崖元圭とされ、南北朝期の創建といわれている、臨済宗建長寺派昇天山金龍院の墓地の南側に位置する。やぐらは、A群からD群までの23基の分布が確認されている。平成11年(1999)にB群とされるやぐら9基の調査が行われている(長谷川・植山2000)。やぐらは上下2段に分けられ、下段の第5号やぐらからは大甕による埋葬を含めて3ヶ所の埋葬遺構が発見されている。この埋葬遺構は、出土遺物から14世紀後半から15世紀後半までに造られたとされている。

**5. 泥牛庵脇やぐら群** 能仁寺の塔頭である泥牛庵の存在する丘陵に2群に分かれて存在する。泥牛庵は、臨済宗円覚寺の末寺で、創建は建武二年(1335)と言われている。開山は、円覚寺第十七世南山士雲和尚と言われている。8基のやぐらが存在し、このうち、昭和61年及び62年に泥牛庵北側の崖面の5基のやぐらが調査されている(砂田1987・長岡1988)。

**6. 能仁寺跡(お屋敷)やぐら群** 上杉憲方の建立と伝えられる福寿山能仁寺跡地の、北側に位置する丘陵南斜面にA・B群の3基のやぐらが確認されている。能仁寺は、18世紀初頭に米倉丹後守忠仰が陣屋を移し「お屋敷」と通称された。

**7. 嶺松寺跡やぐら群** 上行寺西側の通称「殿ヶ谷」には「嶺松寺」が存在したと言われていて、2群のやぐらが存在する。嶺松寺は、臨済宗建長寺の末寺で、開基は瀬戸明神の神職千葉氏の先祖某、開山は月窓元暁といわれている。月窓元暁は、貞治元年(1362)に寂すとされているので、14世紀中頃の創建と考えられる。

**8. 岩松家裏・渡辺家墓地やぐら群** お伊勢山から半島状に突き出した丘陵先端部に、約20基のやぐらがA群～D群の4つの小群で存在する。

**9. お伊勢山やぐら群** 殿ヶ谷と西ヶ谷戸に挟まれたお伊勢山と呼ばれる丘陵の南側斜面に、やぐら2基が存在する。

**10. 長生寺やぐら群** 長生寺は、浄土真宗西本願寺末寺で壽樂山と号する。元の宗派は真言宗であるが、住僧が蓮如に帰依し改宗したと言われている。やぐらは3基確認されている。

**11・12. 西ヶ谷戸A・Bやぐら群** 六浦小学校の東側の丘陵崖面に7基のやぐらが確認されている。同じく西ヶ谷戸Bやぐら群は、西ヶ谷戸Aやぐら群の北の丘陵崖面に4基のやぐらが確認されている。

**13. 六浦大道やぐら群** 金沢区大道1丁目に存在する。六浦湊の最奥部に位置する。平成6年(1994)と翌7年に、15基のやぐら、やぐら転用遺構3ヶ所が調査された(鹿島・鈴木1997)。出土遺物は、一部のかわらけを除き15世紀中頃から16世紀前半のものが大半を占める。

**14. 六浦北部遺跡** 六浦町1771付近に存在する。4つのやぐら群で、計9基のやぐらが調査された。中世の火葬墓の調査が行われた。他のやぐら群からやや離れていて、侍従川の南側に孤立的に存在する。

**15. 六浦三艘地区やぐら群** 六浦町1182に存在する。平成12年(2000)に、平潟湾を囲む丘陵の北側に延びる舌状の丘陵の北西側斜面と南東側斜面で2基のやぐらの調査が行われた(長谷川2000)。

### (3) 上行寺やぐら群の性格

以上、上行寺東やぐら群とその周辺にあるやぐら群についてみて来た。横浜市金沢区南部の六浦から横須賀市の北部にかけては、鎌倉市中に近い密度でやぐら群が分布している。実際にはこれ以上のやぐらが存在

していたのであろうが、過去の開発によって破壊されたものも多い。六浦地区においては、權現山やお伊勢山などの独立した丘陵の縁辺部にやぐら群の分布が認められるが、これらはいずれも平潟湾に面しているという点が共通している。また、六浦と鎌倉を結ぶ六浦道沿いや、釜利谷と朝夷奈を結ぶ白山道沿いにも多くのやぐらが分布している。

確認されているやぐら群の多くは寺院が存在する場所か、またはかつて寺院が存在していたと考えられている場所に立地している。これらの寺院は、寺伝等によればいずれも14世紀代に創建されたとされている。

今回取り上げた上行寺東やぐら群では、上下2段の平場に掘立柱建物址や礎石建物址、池状施設と井戸址が分布し、阿弥陀如来像や五輪塔が刻まれたやぐらも発見されている。建物址は、やぐらと一体となって何らかの宗教施設を構成していたと考えることが出来る。鎌倉市内では、やぐら群のあり方が寺院や寺院跡の占地と関係があるとの指摘がなされている(大三輪1986)。六浦の地においても、鎌倉と同様に、やぐら群と寺院が密接な関係を示していると言えるだろう。

以上のように、六浦地域は鎌倉から朝夷奈切通しを経て六浦湊へと通じる交通の要衝にあり、寺院を中心とした宗教活動や経済活動が盛んに行われたところである。これらの活動に従事した僧侶、またはそれに庇護を与えていたと思われる武家や有力商人との関係から、この六浦周辺に多くのやぐら群が成立したものと考えられる。

(宮坂淳一)

## II. 上行寺東やぐら群を中心とするやぐらの形態的特徴

本地域で調査されたやぐらの規模・形態的特徴を抽出すべく、玄室幅・玄室奥行・玄室高・羨道幅・羨道奥行・前庭幅・前庭奥行の数値を取り、データの集成を行った。集成の対象としたのは13遺跡、計150基である。これらのやぐらの中には、その形状から明らかにやぐらではないとみとめられるものがあり、これらを除外したやぐらの総数は137基となる。中には調査範囲が限られていたり、崩落や後世の改変により当初の形状が失われ、それぞれの部位について正確な数値を得難いものもあったが、当初の形状を推定し得るものは可能な限り積極的に取り上げた。この結果、データ数は12遺跡129基となった(第1,2表)。報告書に計測値が明記してあるものはその数値を用いたが、実際は平面形が歪んでいるやぐらもあるため、適宜平均を取るなどして数値の修正を行っている。数値には推定も含まれるため、すべてのやぐらで必ずしも正確な計測値が得られたわけではない。同様に、立地についても山頂・山腹・山腹・崖裾の境界は必ずしも厳密なものではない。これらの数値や分類については、若干の幅、誤差があることをあらかじめお断りしておく。

### (1) やぐらの構造、羨道・玄室の有無

やぐらの形態は様々であるが、基本的には主体となる玄室があり、①玄室のみのもの、②玄室に羨道、前庭を持つもの、③玄室に直接前庭がつくものの3種に大別される。今回データをとったやぐらでは、129基中前庭を伴うものはわずかに2基、羨道を伴う例も14基に過ぎなかった。明確な前庭がみとめられるのは釜利谷やぐらおよび六浦北部遺跡で各1基のみである(第2図)。

羨道・前庭は崖面の崩落や、やぐら前面の造成等により破壊されてしまうことが多い。今回対象とした各遺跡にも羨道・前庭に当たる部分が壊されていたり、前面に宅地が迫っていて完全に調査できなかつた例がある。これらのやぐらの本来の構造を推定する術はないが、羨道・前庭をもつやぐらは実際にはもっと多かったと考えるのが妥当であろう。また、上行寺東やぐら群には丘陵頂部・山腹に造成された平場を取り囲むやぐらが8基ある。この平場を複数のやぐらに共通する前庭ととらえれば、前庭を持つやぐらは10基となる。

第1表 やぐら計測データ(1)

No	遺跡名	遺構名	立地	開口方向	玄室					漢道			前庭		
					幅	奥行	平面積	平面形態	奥行/幅	天井高	幅	奥行	高さ	幅	奥行
1	荒井やぐら		丘陵中腹	南西	2.00	0.80	1.60	横長方形	0.40						
2	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第1号やぐら	丘陵中腹	南	2.60	0.10	0.26	横長方形	0.04	1.60					
3	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第2号やぐら	丘陵中腹	南	3.50	3.00	10.50	横長方形	0.86	1.60					
4	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第3号やぐら	丘陵中腹	南西	1.50	0.30	0.45	横長方形	0.20	1.20					
5	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第4号やぐら	丘陵中腹	南西	1.30	1.00	1.30	横長方形	0.77	1.08					
6	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第5号やぐら	丘陵中腹	南	1.20	0.70	0.84	横長方形	0.58	1.20					
7	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第6号やぐら	丘陵中腹	南	1.40	1.00	1.40	横長方形	0.71	1.20					
8	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第7号やぐら	丘陵中腹	南	1.60	1.00	1.60	横長方形	0.63	1.20					
9	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第8号やぐら	丘陵中腹	南	1.90	1.20	2.28	横長方形	0.63	1.30					
10	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第9号やぐら	丘陵中腹	南	1.80	1.70	3.06	正方形	0.94						
11	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第10号やぐら	丘陵中腹	南	1.40	0.70	0.98	横長方形	0.50						
12	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第11号石窟	丘陵中腹	南	1.90	1.70	3.23	横長方形	0.89	1.20					
13	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第13号石窟	崖裾	南東	2.20	2.20	4.84	正方形	1.00	1.60					
14	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第15号石窟	丘陵中腹	南東	2.40	2.70	6.48	縦長方形	1.13	1.80					
15	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第16号石窟	崖裾	南東	1.90	1.20	2.28	横長方形	0.63	2.00					
16	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第17号石窟	丘陵中腹	南東	1.50	0.10	0.15	横長方形	0.07	0.70					
17	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第18号石窟	丘陵中腹	南東	2.40	0.50	1.20	横長方形	0.21	1.00					
18	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第19号石窟	丘陵中腹	南	1.00	0.40	0.40	横長方形	0.40	0.90					
19	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第20号石窟	丘陵中腹	南	1.00	0.80	0.80	横長方形	0.80	0.80					
20	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第21号石窟	丘陵中腹	南西	1.70	1.10	1.87	横長方形	0.65	1.20					
21	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第22号石窟	丘陵中腹	南西	0.65	0.20	0.13	横長方形	0.31	0.60					
22	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第23号石窟	丘陵中腹	南東	2.20	2.60	5.72	縦長方形	1.18	1.70					
23	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第24号石窟	崖裾	南西	2.40	3.20	7.68	縦長方形	1.33	1.80	1.20	0.40	1.80		
24	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第25号石窟	丘陵中腹	南	1.80	0.60	1.08	横長方形	0.33						
25	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第28号石窟	崖裾	南東	1.60	2.20	3.52	縦長方形	1.38	1.83					
26	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第30号石窟	崖裾	南東	2.10	1.90	3.99	正方形	0.90	1.90					
27	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第31号石窟	崖裾	東	3.60	3.70	13.32	正方形	1.03	2.30	2.00				
28	金利谷東6丁目西地区やぐら群	第32号石窟	崖裾	南東	1.60	1.20	1.92	横長方形	0.75	1.70					
29	坂本元屋敷やぐら群	2号やぐら	崖裾	南西	3.70	5.00	18.50	縦長方形	1.35	2.40	1.40	0.40	1.80		
30	金利谷やぐら群	1号窟	崖裾	南	3.00	3.30	9.90	正方形	1.10	1.97					
31	金利谷やぐら群	2号窟	崖裾	南	1.43	0.80	1.14	横長方形	0.56	0.64					
32	金利谷やぐら群	3号窟	崖裾	南西	1.52	1.25	1.90	横長方形	0.82	1.67					
33	金利谷やぐら群	4号窟	崖裾	南西	3.60	3.03	10.91	横長方形	0.84	2.02					
34	金利谷やぐら群	7号窟	崖裾	南西	3.62	2.62	9.48	横長方形	0.72	1.84					
35	金利谷やぐら群	8号窟	崖裾	南西	1.37	1.74	2.38	縦長方形	1.27	1.82					
36	金利谷やぐら遺跡	1号やぐら	崖裾	北西	3.20	2.50	8.00	横長方形	0.78	1.85					
37	金利谷やぐら遺跡	2号やぐら	崖裾	東	3.20	2.60	8.32	横長方形	0.81	1.75					
38	金利谷やぐら遺跡	3号やぐら	丘陵中腹	南東	2.86	2.45	7.01	横長方形	0.86	1.58	1.74	1.73	1.43	2.85	0.75
39	金利谷やぐら遺跡	4号やぐら	崖裾	北北東	4.10	3.30	13.53	横長方形	0.80	1.78					
40	金利谷やぐら遺跡	5号やぐら	崖裾	北	2.90	2.40	6.96	横長方形	0.83	1.75					
41	金利谷やぐら遺跡	8号やぐら	崖裾	北	3.20	2.60	8.32	横長方形	0.81	1.85					
42	金利谷やぐら遺跡	9号やぐら	崖裾	東	2.20	1.70	3.74	横長方形	0.77						
43	金利谷やぐら遺跡	10号やぐら	崖裾	東	2.40	1.80	4.32	横長方形	0.75						
44	金利谷やぐら遺跡	11号やぐら	丘陵中腹	西	1.70	0.30	0.51	横長方形	0.18						
45	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第1号やぐら	崖裾	南東	4.35	4.50	19.58	正方形	1.03	2.80					
46	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第3号やぐら	崖裾	南東	4.70	4.60	21.62	正方形	0.98	2.50					
47	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第4号やぐら	崖裾	南東	4.30	1.60	6.88	横長方形	0.37	2.00					
48	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第6号やぐら	丘陵中腹	南東	4.22	2.20	9.28	横長方形	0.52	2.30					
49	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第7号やぐら	丘陵中腹	南東	2.38	1.80	4.28	横長方形	0.76	2.00					
50	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第8号やぐら	丘陵中腹	南東	5.60	2.40	13.44	横長方形	0.43	2.00					
51	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第9号やぐら	丘陵中腹	南東	2.80	2.60	7.28	正方形	0.93						
52	泥牛庵脇やぐら群	第5号やぐら	崖裾	北西	4.50	4.30	19.35	正方形	0.96	2.90	1.40				
53	上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)	第1号やぐら	崖裾	南	5.30	4.50	23.85	横長方形	0.85						
54	上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)	第2号やぐら	崖裾	南	1.40	1.80	2.52	縦長方形	1.29	1.70					
55	上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)	第3号やぐら	崖裾	南	1.80	1.60	2.88	横長方形	0.89	1.80					
56	上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)	第4号やぐら	崖裾	南	1.26	0.40	0.50	横長方形	0.32	0.80					
57	上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)	第5号やぐら	丘陵中腹	南	0.73	0.90	0.66	縦長方形	1.23	0.80					
58	上行寺東やぐら群	1号やぐら	崖裾	南	2.45	2.01	4.92	横長方形	0.82	1.38					
59	上行寺東やぐら群	2号やぐら	崖裾	南	1.34	0.71	0.95	横長方形	0.53	1.05					
60	上行寺東やぐら群	3号やぐら	崖裾	南	1.34	1.08	1.45	横長方形	0.81	1.53					
61	上行寺東やぐら群	4号やぐら	崖裾	南	3.06	2.19	6.70	横長方形	0.72	2.44					
62	上行寺東やぐら群	5号やぐら	崖裾	南	1.57	0.70	1.10	横長方形	0.45	0.70					
63	上行寺東やぐら群	6号やぐら	崖裾	南	1.91	1.25	2.39	横長方形	0.65	1.20					
64	上行寺東やぐら群	7号やぐら	崖裾	南	1.48	0.84	1.24	横長方形	0.57	1.30					
65	上行寺東やぐら群	8号やぐら	崖裾	南	1.67	0.84	1.40	横長方形	0.50	1.93					
66	上行寺東やぐら群	9号やぐら	丘陵中腹	南	2.53	2.60	6.58	正方形	1.03	1.58					
67	上行寺東やぐら群	10号やぐら	丘陵中腹	南東	2.23	2.20	4.91	正方形	0.99						
68	上行寺東やぐら群	11号やぐら	丘陵中腹	東	1.22	1.10	1.34	正方形	0.90	1.41					
69	上行寺東やぐら群	12号やぐら	丘陵中腹	東	1.35	0.70	0.95	横長方形	0.52	1.60					
70	上行寺東やぐら群	13号やぐら	丘陵中腹	東	1.70	2.20	3.74	縦長方形	1.29	1.24					
71	上行寺東やぐら群	14号やぐら	丘陵中腹	南東	0.90	0.86	0.77	正方形	0.96	0.90					
72	上行寺東やぐら群	15号やぐら	丘陵中腹	南東	1.29	1.07	1.38	横長方形	0.83	1.00	1.05	0.45			
73	上行寺東やぐら群	16号やぐら	丘陵中腹	南東	1.20	0.97	1.16	横長方形	0.81						
74	上行寺東やぐら群	17号やぐら	丘陵中腹	東	0.64	0.58	0.37	正方形	0.91						
75	上行寺東やぐら群	18号やぐら	丘陵中腹	東	1.84	0.90	1.66	横長方形	0.49						
76	上行寺東やぐら群	19号やぐら	丘陵頂部	南	2.52	1.95	4.91	横長方形	0.77	1.77				前面平場	
77	上行寺東やぐら群	20号やぐら	丘陵頂部	南	1.53	1.00	1.53	横長方形	0.65					前面平場	

第2表 やぐら計測データ(2)

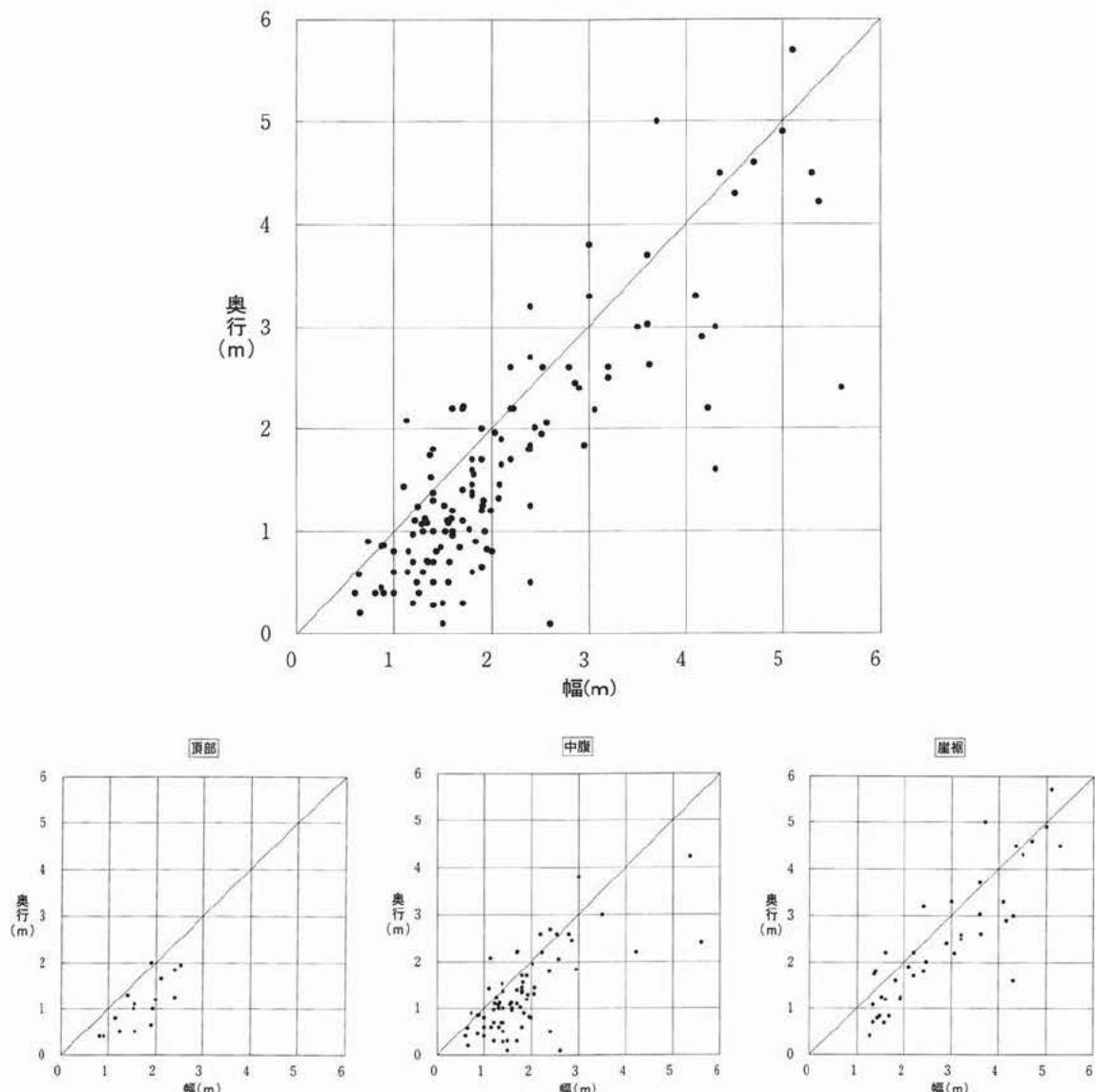
No	遺跡名	遺構名	立地	開口方向	玄室						羨道			前庭	
					幅	奥行	平面積	平面形態	奥行/幅	天井高	幅	奥行	高さ	幅	奥行
78	上行寺東やぐら群	21号やぐら	丘陵頂部	東	1.55	1.10	1.71	横長方形	0.71	1.32					前面平場
79	上行寺東やぐら群	22号やぐら上段	丘陵頂部	東	2.40	1.25	3.00	横長方形	0.52						前面平場
80	上行寺東やぐら群	22号やぐら下段	丘陵頂部	東	2.10	1.65	3.47	横長方形	0.79						
81	上行寺東やぐら群	23号やぐら	丘陵頂部	東	2.40	1.84	4.42	横長方形	0.77						前面平場
82	上行寺東やぐら群	24号やぐら	丘陵中腹	南東	0.87	0.85	0.74	正方形	0.98	0.90					
83	上行寺東やぐら群	26号やぐら	丘陵中腹	南東	1.60	0.96	1.54	横長方形	0.60	1.05	1.18	0.30			
84	上行寺東やぐら群	27号やぐら	丘陵中腹	南東	1.25	1.24	1.55	正方形	0.99	1.12					
85	上行寺東やぐら群	28号やぐら	丘陵中腹	南東	1.56	1.08	1.68	横長方形	0.69	1.14					
86	上行寺東やぐら群	29号やぐら	丘陵中腹	南東	1.59	1.12	1.78	横長方形	0.70	0.96	1.13	0.23			
87	上行寺東やぐら群	30号やぐら	丘陵中腹	南東	1.38	1.53	2.11	縦長方形	1.11						
88	上行寺東やぐら群	31号やぐら	丘陵中腹	南東	2.57	2.06	5.29	横長方形	0.80	1.54					
89	上行寺東やぐら群	32号やぐら	丘陵中腹	南東	2.03	1.96	3.98	正方形	0.97	1.48					
90	上行寺東やぐら群	33号やぐら	丘陵中腹	南東	2.95	1.84	5.43	横長方形	0.62	1.40					
91	上行寺東やぐら群	34号やぐら	丘陵中腹	南東	1.71	2.22	3.80	縦長方形	1.30	1.46					
92	上行寺東やぐら群	35号やぐら	丘陵中腹	南東	2.08	1.45	3.02	横長方形	0.70	1.73					
93	上行寺東やぐら群	36号やぐら	丘陵中腹	南東	1.80	1.45	2.61	横長方形	0.81	1.44					
94	上行寺東やぐら群	37号やぐら	丘陵中腹	南東	1.82	1.56	2.84	横長方形	0.86	1.48					
95	上行寺東やぐら群	38号やぐら	丘陵中腹	南東	1.95	0.82	1.60	横長方形	0.42	1.45					
96	上行寺東やぐら群	39号やぐら	丘陵中腹	南東	1.80	1.35	2.43	横長方形	0.75	1.50	1.29	0.29	1.62		
97	上行寺東やぐら群	40号やぐら	丘陵中腹	南東	5.37	4.22	22.66	横長方形	0.79	2.70	1.80	1.40	2.60		
98	上行寺東やぐら群	41号やぐら	丘陵頂部	西	1.56	0.50	0.78	横長方形	0.32						
99	上行寺東やぐら群	42号やぐら	丘陵中腹	北東	1.13	2.08	2.35	縦長方形	1.84	0.90					前面平場
100	上行寺東やぐら群	43号やぐら	丘陵中腹	南東	1.32	1.12	1.48	横長方形	0.85	1.05	0.83	0.50			前面平場
101	上行寺東やぐら群	44号やぐら	丘陵中腹	北東	1.92	1.30	2.50	横長方形	0.68	1.20	1.00	0.60			前面平場
102	上行寺東やぐら群	1号窟	崖裾	南東	4.30	3.00	12.90	横長方形	0.70	3.50					
103	上行寺東やぐら群	2号窟	崖裾	南	5.10	5.70	29.07	縦長方形	1.12	2.73					
104	六浦大道やぐら群	1号やぐら	丘陵中腹	南東	2.07	1.32	2.73	横長方形	0.64	1.41					
105	六浦大道やぐら群	2号やぐら	丘陵中腹	南東	1.10	1.43	1.57	縦長方形	1.30	1.00					
106	六浦大道やぐら群	3号やぐら	丘陵中腹	南	1.00	0.60	0.60	横長方形	0.60	1.10					
107	六浦大道やぐら群	4号やぐら	丘陵中腹	南東	0.87	0.45	0.39	横長方形	0.52	1.22					
108	六浦大道やぐら群	5号やぐら	丘陵中腹	南東	1.77	1.02	1.81	横長方形	0.58	0.87					
109	六浦大道やぐら群	6号やぐら	丘陵中腹	南東	1.14	0.60	0.68	横長方形	0.53	1.20					
110	六浦大道やぐら群	7号やぐら	丘陵中腹	南東	1.80	1.38	2.48	横長方形	0.77	1.00					
111	六浦大道やぐら群	8号やぐら	丘陵中腹	南	1.40	1.37	1.92	正方形	0.98	1.17					
112	六浦大道やぐら群	9号やぐら	丘陵中腹	南	3.00	3.80	11.40	縦長方形	1.27	2.90					
113	六浦大道やぐら群	10号やぐら	丘陵中腹	南	1.40	0.28	0.39	横長方形	0.20	0.90					
114	六浦大道やぐら群	11号やぐら	丘陵中腹	南	1.40	0.50	0.70	横長方形	0.36	1.00					
115	六浦大道やぐら群	12号やぐら	丘陵中腹	南	0.60	0.40	0.24	横長方形	0.67	1.00					
116	六浦大道やぐら群	13号やぐら	丘陵中腹	南	1.20	0.30	0.36	横長方形	0.25	1.10					
117	六浦大道やぐら群	14号やぐら	丘陵中腹	南	1.30	0.60	0.78	横長方形	0.46	1.00					
118	六浦大道やぐら群	15号やぐら	丘陵中腹	南東	1.70	1.40	2.38	横長方形	0.82	1.10					
119	六浦北部遺跡	第9号横穴	丘陵頂部	南東	1.15	0.80	0.92	横長方形	0.70	0.87					
120	六浦北部遺跡	第10号横穴	丘陵頂部	南	1.93	1.00	1.93	横長方形	0.52	1.13	0.85	0.25		1.60	0.60
121	六浦北部遺跡	第11号横穴	丘陵頂部	南東	1.99	1.20	2.39	横長方形	0.60	1.00					
122	六浦北部遺跡	第12号横穴	丘陵頂部	南	1.24	0.50	0.62	横長方形	0.40	0.90					
123	六浦北部遺跡	第13号横穴	丘陵頂部	南東	0.90	0.40	0.36	横長方形	0.44	0.80					
124	六浦北部遺跡	第14号横穴	丘陵頂部	南東	0.80	0.40	0.32	横長方形	0.50	0.95					
125	六浦北部遺跡	第15号横穴	丘陵頂部	南	1.90	0.65	1.24	横長方形	0.34	1.10					
126	六浦北部遺跡	第16号横穴	丘陵頂部	南西	1.90	2.00	3.80	正方形	1.05	1.25					
127	六浦北部遺跡	第17号横穴	丘陵頂部	南	1.40	1.30	1.82	正方形	0.93						
128	六浦三艘地区やぐら群	第1号やぐら	崖裾	西	4.16	2.90	12.06	横長方形	0.70	2.00	1.10	1.80			
129	六浦三艘地区やぐら群	第2号やぐら	崖裾	南東	5.00	4.90	24.50	正方形	0.98	2.64					

このように、前庭はやぐら前面の大きな範囲に広がる可能性を考慮しなければならないが、往々にして宅地の裏に存在するやぐらではそこまで調査が及んでいない。しかし、そういう事情を割り引いたとしても、現況で羨道・前庭を伴うやぐらが全体の1割に満たないということは、この地域において主体となるものではなかったことを示すのだろう。

なお、鎌倉市番場ヶ谷やぐら群でも羨道・前庭の有無による分類が行われている。構造が明らかなやぐら17基中、羨道を持たないものが11基あるが、前庭を持たないものは2基のみである(永井他1986)。一遺跡だけの限られたデータであり、遺存状態の差もあるだろうが、横浜市域とは数値上大きな違いを示している。

## (2) 玄室の規模・形状

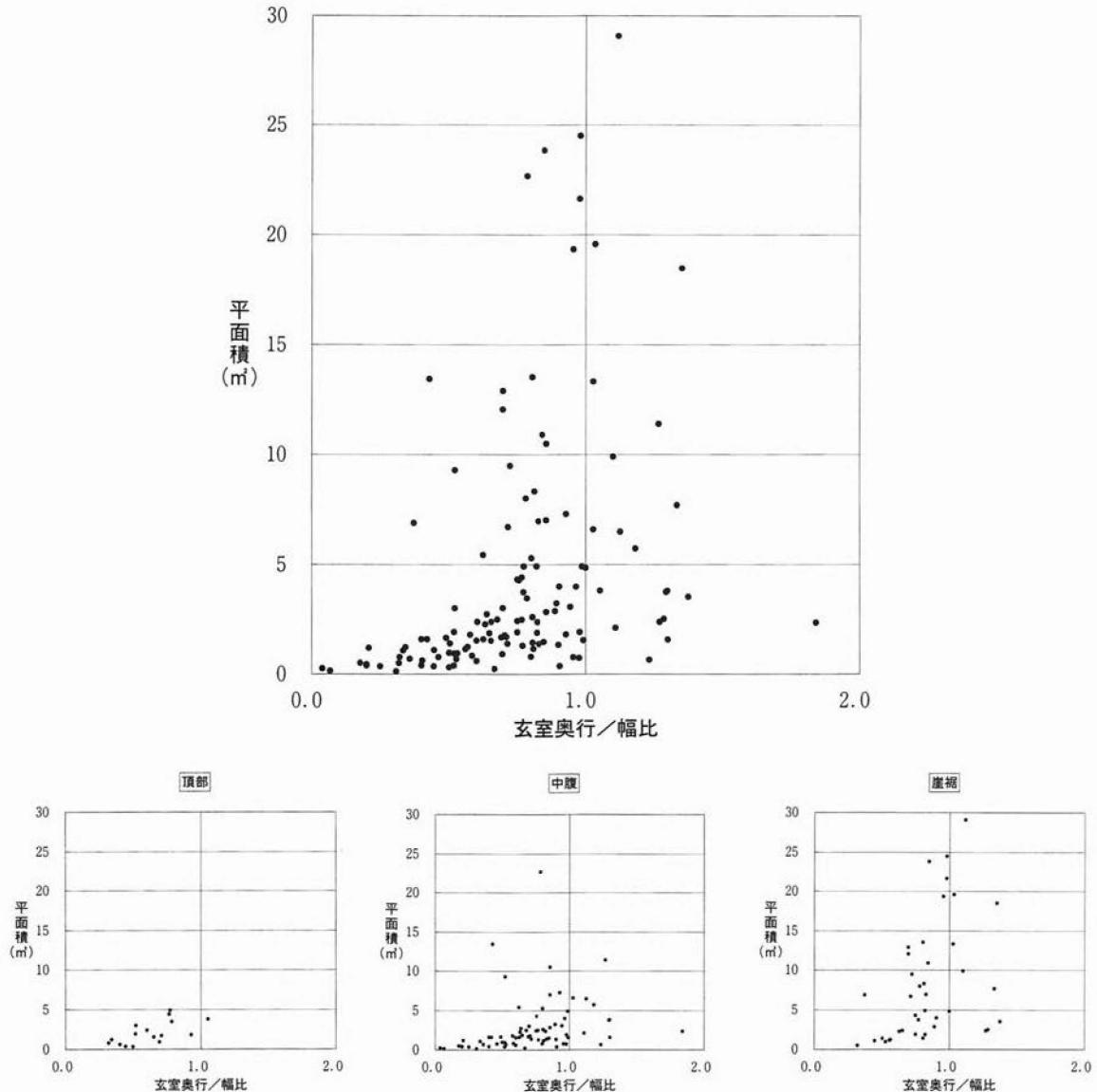
羨道・前庭を持つ例が少ないため、規模・形状については玄室のみを検討の対象とした。第3図は各やぐらの幅を横軸に、奥行を縦軸に落としたグラフである。玄室の規模は幅・奥行とも2m以下の小型のものが多く、幅2m以下のものが80基で全体の63%を占める。幅3m以下では107基で全体の84%となる。玄室の平



第3図 玄室の規模(上段:全体、下段:立地別)

面積では $4\text{ m}^2$ 以下のものが89基(70%)、 $6\text{ m}^2$ 以下では99基(77%)である。天井高についても、内部で動き回るには不自由だったであろう高さ1.6m以下のものが71基あり、天井高が明らかなやぐらの65%となる。他地域のやぐらのデータを細かく取っていないので単純な比較はできないが、総じて平面的に狭く、天井が低いものが多いと言えよう。鎌倉市の百八やぐらのデータ(田代1986 a, b)では、玄室幅2m内外以下のものが全体の7割以上を占める。百八やぐらは200基以上の小規模なやぐらが群集し、その中に一定割合で中規模、大規模なやぐらが存在することが明らかになっている。このようなやぐらの規模、分布および立地等は特に上行寺東やぐら群の様相と共通する部分が多くみとめられる。

玄室の平面形態を見ると、奥行／幅の数値が0.9より小さい、すなわち奥行に対して幅が広い横長方形の形のものが93基(72%)と大多数を占める。奥行／幅が0.9~1.1のものを正方形、1.1より大きいものを縦長方形とした場合、正方形は21基(16%)、縦長方形は15基(12%)となる。第4図は奥行／幅比を横軸に、縦軸に平面積を落としたグラフである。中央線より左が横長方形、右が縦長方形、中央に近いほど正方形に近いことを示す。グラフの左下、つまり、平面積が小さく横長方形のものが多いうことが明らかである。前面を削平さ



第4図 玄室平面の縦横比(上段:全体、下段:立地別)

れてしまっている調査例があるため、実際は7割よりも少なくなるだろうが、横長方形が主体となる全体的な傾向は変わらないと思われる。番場ヶ谷やぐら群でも同様の奥行／幅による分類がなされており、半数以上の17基中9基が横長方形となっている。このやぐら群も谷奥の斜面中腹に位置しており、各やぐらの形状・規模ともに上行寺東やぐら群等との共通点が見られる。

また、今回集成したやぐらの中で、横断面形状が明らかなやぐらは119基あった。このうち奥壁中央が高い、いわゆる家形(舟底形・屋根形)形状を持つものは全くなかった。壁面に梁を渡したような痕跡をとどめるやぐらも見られない。鎌倉市内における家形のやぐらは比較的大型で、崖裾に多く見られる傾向がある。横浜市内では、崖裾で調査されたやぐらは41基、幅3mを超す大型のやぐらは19基である。調査の絶対数は少ないが、本地域の特色として家形のやぐらが少ない(現時点では皆無)ということが指摘できよう。

### (3) やぐらの立地

以上で述べてきた諸特徴を個々の立地ごとに検討する。やぐらの総数137基中、丘陵頂部もしくは斜面中腹に位置するものが89基(65%)、崖裾は48基(35%)である。無論、これは発掘調査が行われたやぐらの数であ

り、これをもって崖裾よりも斜面・頂部にやぐらが多く分布すると言うことはできない。特に本地域の場合、既に消滅したやぐらも多くあったと考えられる。また、丘陵の下端から頂部までを調査した希有な例である上行寺東やぐら群が含まれるため、鎌倉市内や三浦半島の調査例に比べて丘陵頂部および山腹の基数が多く出る傾向もある。

第3図、第4図下半に示したとおり、山腹～頂部では玄室規模が小さく、崖裾に比較的大きなやぐらが分布する傾向が明らかである。同時に頂部・山腹に横長方形のやぐら多いこともみとめられよう。これらの形態差は単に立地の違いとも考えられる。しかし、龕のような、小さく正面から拝むだけのようなやぐらと、人が入って中で何らかの行動が可能な大型のやぐらとでは自ずとその性格、機能が異なるはずである。上行寺東やぐら群や百八やぐら、名越まんだら堂やぐら群など、山稜から山腹にあるやぐら群は、小規模なものが群集する例が多い。これに対して、急傾斜地崩壊対策工事に伴って調査されるやぐらは往々にして崖裾にあり、比較的規模が大きい。もちろん崖裾にも小さなやぐらはあるし、山腹に大規模なものもある。しかし、主体となるやぐらの規模・構造は頂部・山腹と崖裾で明らかに異なっている。山頂・山腹と崖裾では場の性格が異なり、その違いがやぐらの形態にも反映されていると考えられる。小型のやぐらが多く、かつ崖裾での調査例が少ない横浜市域で家形のやぐらが皆無なのも、こうした性格の違いを反映しているのであろう。

以上述べて来たことはこれまでの説の追認に過ぎないかもしれないが、数値的にある程度の傾向を示すことができた。無論、限られた範囲のデータであるため、今後の調査によって得られるデータによって補完・修正されねばならない。さらに、三浦半島、鎌倉市域についても同様の基準でデータを検討することによって、それぞれの地域の特性をより鮮明にすることができるだろう。

(鈴木庸一郎)

### III. 遺物からみた上行寺東遺跡

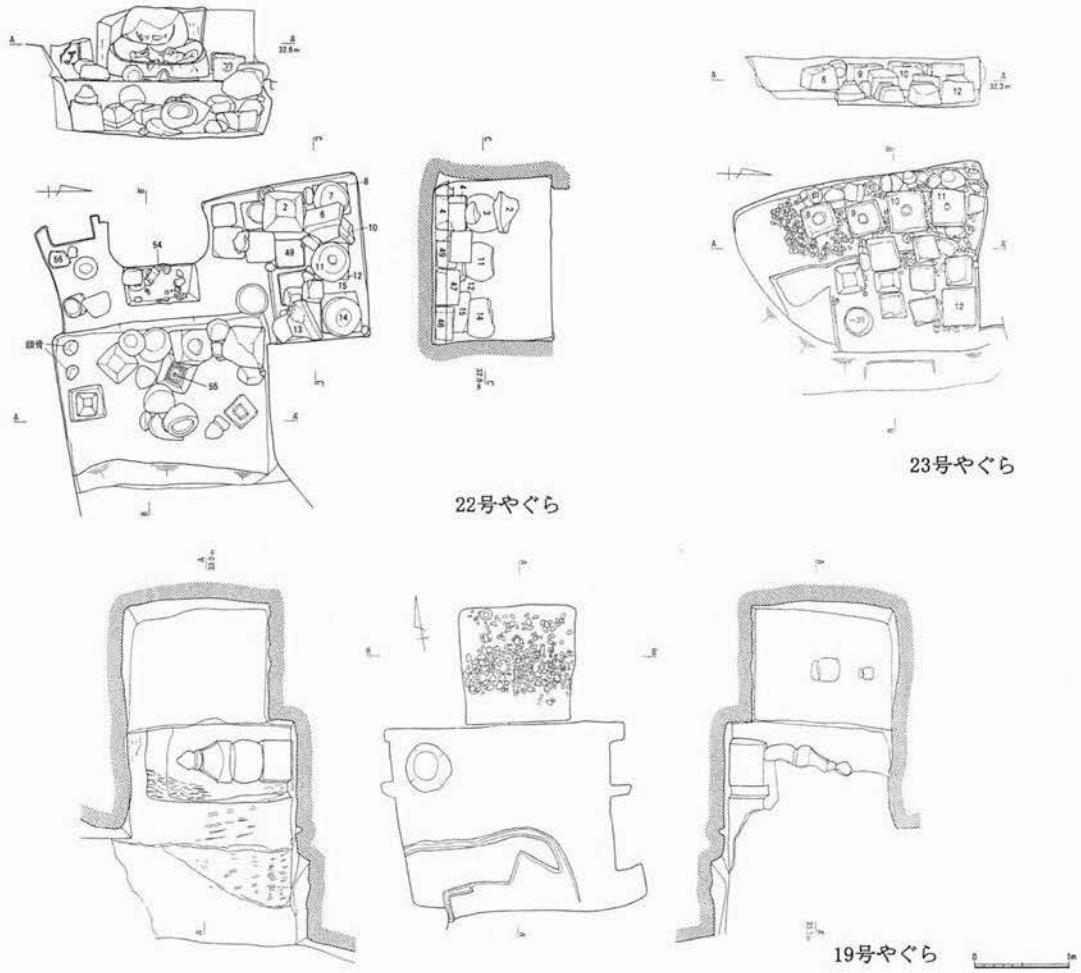
上行寺東やぐら群のやぐら内における石塔の造立、配置について検討してみたい。

上行寺東やぐら群は、横浜市金沢区六浦2丁目の京浜急行電鉄金沢八景駅の南西側に隣接する丘陵上に立地する。この丘陵は、北西から南東方向に傾斜し、先端は半島状に突出している。標高は18～36mを測る。丘陵の基盤層は野島凝灰質砂岩で、海食によって形成された上・中・下の3段にわたる崖面を掘り込んでやぐら群が構築されていた(第2図)。また、海食崖下では岩盤を削平して平場が形成され、建物が構築されている。発見された遺構はやぐら44基、建物址10棟、池址1ヶ所、井戸址3基、土坑墓18などである。

上段は、馬の背状をなす丘陵頂部の南側を切り崩して、平場を形成している。平場には5号礎石建物址、6号掘立柱建物址があり、これを取り巻く崖面には19～23号やぐらが掘られていた。

中段は、上段平場との比高差5～6m前後の海蝕崖にやぐらを、崖下部に平場を造成して建物、井戸、土坑墓が構築されている。遺構の配置は、大きく南側、東側、北東側に分けられる。中段南側の平場には1号掘立柱建物址、2号礎石建物址があり、崖面には9・10号やぐらが掘られている。中段東側には3号掘立柱建物址、11～13・16・24号やぐらがある。さらに中段の北東側の平場には7号礎石建物址、8・9号掘立柱建物址、2・3号井戸址等が、崖面には17・18・42・43号やぐらが分布している。

下段の海蝕崖裾部にもやぐら群が構築されているが、下段下部は大きく削平されているため急な崖となっている。やぐらは、その分布から南側、南東側、東側に分けられる。南側には1～8号やぐらが、南東側には14・15号やぐらが、東側には25～40号やぐらが位置している。

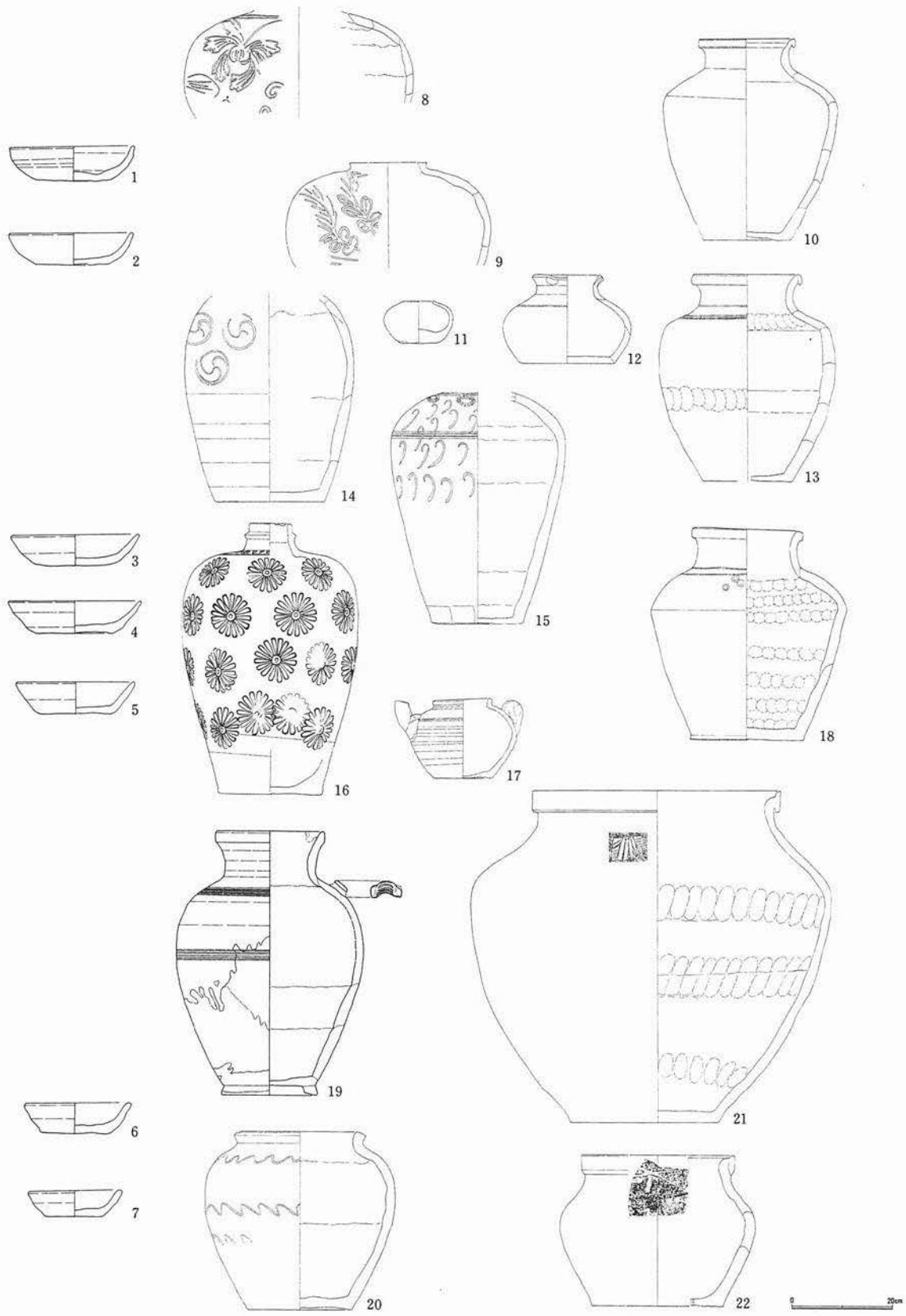


第5図 上行寺東やぐら群 上段やぐらの遺物出土状況

最も注目されるのは、上段のやぐらであろう。上段の中心にある2間×3間の6号掘立柱建物址は、西側に縁側を持ち、南西側に池を併設していた。この建物の柱筋と19~23号やぐらは同一の軸線上にあることから、同一時間幅内に存在していた可能性が高いとされている。その後この6号掘立柱建物から5号礎石建物址に建て替えられる際に、やぐらの一部が削平されるが、3間×3間の仏堂等の建物を中心として回廊状にやぐら群が展開する状況が想定される。上段西側に位置する22号やぐらは、玄室の奥壁中央に阿弥陀如来座像を、またその左側には五輪塔の浮彫が彫刻されている。さらにこのやぐらは玄室右側に一段低い副室を設けていて、その内部にはぎっしりと五輪塔が配列されていた。配列された五輪塔のうち、奥壁寄りの2個体は月輪内に梵字を彫っている(第5図)。阿弥陀如来座像前面の方形の掘り込みには、火葬骨・かわらけとともに火葬骨を納めた瀬戸灰釉瓶子(第6図8)が入れられていた。一方、副室は五輪塔の地輪上部まで火葬骨が堆積していて、五輪塔の間から火葬骨を納めた常滑壺が2個体(第6図10・13)出土している。

22号やぐらの北側に並列する20号やぐらは、形状が不整形であるが、奥壁には2個体の五輪塔の浮彫が認められた。平場の北側に位置する19号やぐらは、玄室奥の一段高い位置に副室を設けている。副室内には玉石敷きを残すのみで、石塔類は原位置を保っていなかった。玄室の両側壁には、それぞれ1体ずつ五輪塔が浮彫されていた。22号やぐらの南側に隣接する23号やぐらは、玄室奥に壇を有し、その上に玉石が敷かれて五輪塔4基が並べられている。さらにその前面には8基の五輪塔が並んでいる。

中段東側では、11・16・24号やぐらで納骨穴が認められた。中段北東側の17・18号やぐらは、安山岩製五



1・2・8・10・13：22号、3・4：24号、6・7：39号、9・11：35号  
12・15・18・20・22：34号、14：19号、16・17：43号、19：17号、21：37号

第6図 上行寺東やぐら群出土遺物(土器・陶磁器)

輪塔を主体としていて、本やぐら群の中では新しい。43号やぐらは玄室内に玉石が敷かれていて、前方には2基の五輪塔が立ち、奥壁寄りの穴には瀬戸瓶子が埋納されていた。玉石上には多量の火葬骨が検出されていることから、埋納穴の上にもなんらかの石塔が建てられていた可能性が高い。

下段のやぐら群では、14・15・26・28・29・34・35・37・38号やぐらで五輪塔の配列が見られた。35・37号やぐらでは大型の五輪塔を中心に配列されているが、その他のやぐらではあまり規模の差は認められない。

報告書によるとやぐら群と遺構の年代について、下記のように3期に区分されている。

#### I期 14世紀中頃～15世紀中頃

やぐら群、1・3・6号掘立柱建物址、1号井戸址、池址

#### II期 15世紀中頃から15世紀末ないしは16世紀初頭 やぐら群廃絶後

2・5・7号礎石建物址、8・9号掘立柱建物址、2・3号井戸址、切り通し道址

#### III期 15世紀末～16世紀初頭

土坑墓、やぐら利用墓（注：やぐら内に直接埋葬されたもの）

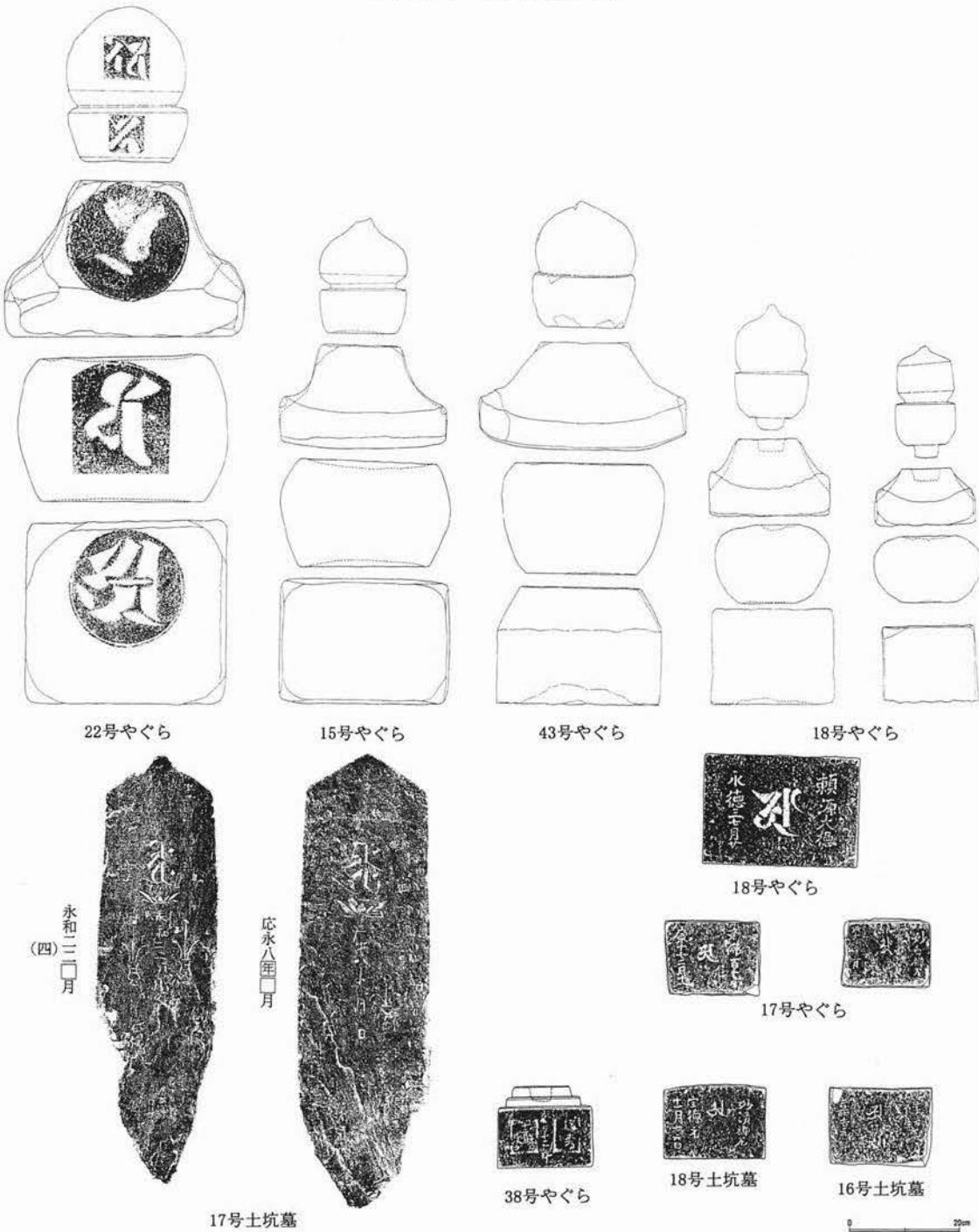
やぐら群より出土したかわらけ・陶器を第6図に示した。そらの年代観から、本やぐら群では14世紀第2四半期から15世紀第2四半期の年代が考えられる。壺・甕・水注類はいずれも火葬骨を納めた骨壺として使われているため、若干の年代的なずれを考慮する必要があるが、伴出しているかわらけ等からみても大きな問題はないと思われる。常滑窯の製品の中で、玉縁口縁壺はやぐら内への火葬骨壺として一般的に見られるが、常滑編年の6・7形式で13世紀後半から14世紀中頃に比定されているため、もう少し細かい形式的な検討をしていく必要があるかも知れない。

そのほかにも、やぐら群の年代を直接的にしめすものとしては、紀年銘を記した石塔類があげられる。

- |         |            |                        |
|---------|------------|------------------------|
| ・17号やぐら | 安山岩製五輪塔地輪  | 応永17年(1410)、永享8年(1436) |
| ・18号やぐら | 安山岩製五輪塔地輪  | 永徳3年(1383)             |
| ・38号やぐら | 安山岩製宝篋印塔基礎 | 宝徳12年(1440)            |
| ・16号土坑墓 | 安山岩製五輪塔地輪  | 嘉吉元年(1441)             |
| ・17号土坑墓 | 緑泥片岩製板碑    | 永和4年(1378)、応永8年(1401)  |
| ・18号土坑墓 | 安山岩製五輪塔地輪  | 宝徳元年(1449)             |

報告書では、土坑墓より出土している石塔類は、やぐら群から持ち出されたものと考えられている。これに基づけば、やぐら群は少なくとも14世紀後半から15世紀中頃まで存続していたことが明らかである。

上行寺東やぐら群では、凝灰岩製の五輪塔が主体で、安山岩製の五輪塔はごく僅かであり、緑泥片岩製の板碑がいずれにも伴っている。やぐらから出土している石塔類は、自然に崩れたり、人為的に動かされたりしているものが多いため、地輪や水輪を除くと原位置を保っていない場合が多い。組み合わせが明らかな五輪塔を図示したのが第7図である。左側が22号やぐらから出土した凝灰岩製のもので、総高114.1cmを測る。月輪内に薬研彫りで梵字を彫り込んでいて、火輪の軒は反りが弱く、水輪の最大径が中位にあって太鼓胴状を呈する。ほぼ同規模の五輪塔がもう一体あるため、一対になっていたと考えられる。左から2番目は、15号やぐらから出土した凝灰岩製のもので、総高は86.3cmを測る。火輪の軒はやや低く、水輪の最大径は胴部中位よりやや上にあるものの、太鼓胴状を呈する。中央は43号やぐらから出土した凝灰岩製のもので、総高は84.7cmを測る。梵字の彫り込みに金箔を漆で付着させている。火輪の軒は高く反り上がり、水輪の最大径は上位にある。なお、19号やぐら内の浮彫五輪塔は、西側が総高1.2mで、梵字が丸彫されている。東側は



第7図 上行寺東やぐら群出土遺物(五輪塔・板碑)

総高1.3mで梵字は薬研影状である。いずれも火輪の軒先は反りが弱く、水輪の最大径はやや上位にある。第7図の右側の2個体は、18号やぐらから出土した安山岩製のものである。総高は、左側が64cmで、右端が55cmを測る。いずれも空風輪と火輪はほど組で、火輪の軒先だけ強く反り上がり、水輪の最大径は上位にある。

先にも述べたように、五輪塔の大半は凝灰岩製であり、その下限は明らかにし得ないが、14世紀代を中心製作されたものと考えられる。一方、紀年銘を有する五輪塔・宝篋印塔はいずれも安山岩製であり、その年代から見ると15世紀代が多い。最も古いものは14世紀後半であるため、安山岩製の五輪塔はそれ以降に主体的に造られていた可能性がある。

次に周辺のやぐら群と比較してみたい。上行寺裏の瀬戸町21番地やぐら群や、近隣する釜利谷やぐら群、六浦大道やぐら群では、安山岩製の石塔を主体としていることから、15世紀代を中心とした時期に造られたのであろう。瀬戸町やぐら群では、出土した常滑の大甕から14世紀後半以降に主体があるようと思われる。やや離れているが、六浦北部遺跡群は凝灰岩製五輪塔を主体としていて、常滑の玉縁口縁壺を出土していることからも14世紀代を中心としているものと思われる。このように、六浦周辺では14世紀前半には出現していたと思われる上行寺東やぐら群が、15世紀中頃まで存続する中で、14世紀後半から15世紀にかけて周辺にやぐらの分布が広がっていったのではないだろうか。

(宍戸信悟)

## 参考・引用文献

- 赤星直忠 1959『鎌倉市史 考古編』
- 安生素明 2003「中世鎌倉地域の葬送－「やぐら」を中心として－」『駒澤考古』29 駒澤大学考古学研究室
- 上田 薫・植山英史 2001『釜利谷東6丁目西地区やぐら群(2次)』かながわ考古学財団調査報告107
- 石井 進 1986「中世の六浦」『神奈川地域史研究』3・4
- 石井 進 1986「中世六浦の歴史」『三浦古文化』40 中世の六浦特集 三浦古文化研究会
- 岡崎文喜他 1982「六浦北部遺跡－中世火葬墓の綜合調査」六浦北部遺跡調査団
- 小川裕久・塚田明治 1983「横浜市金沢区釜利谷町坂本元屋敷やぐら群調査概報」『横須賀考古学会年報』26
- 鹿島保宏・鈴木重信 1997「六浦大道やぐら群」神奈川県横浜治水事務所・財團法人横浜市ふるさと歴史財団
- 鹿島保宏・鈴木重信・橋本昌幸 2000『金沢区No52(上行寺裏)遺跡－平成9・10年度範囲確認調査報告書』横浜市教育委員会
- 神奈川県立金沢文庫 1993『金沢八景 歴史・景観・美術』
- 神奈川地域史研究会編 1986『神奈川地域史研究』第3・4号合併号
- 金沢区制五十周年記念事業実行委員会 2001『かなざわの歴史』
- 倉多正胤・井上哲朗・宮瀧交二 1986「横浜市金沢区六浦地域のやぐら群について」『三浦古文化』40 中世の六浦特集 三浦古文化研究会
- 小林義典・戸田哲也 2002「上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書」上行寺東やぐら群遺跡発掘調査団
- 宗臺富貴子・宗臺秀明他 1998a「上行寺東やぐら群」「中世石窟遺構の調査II－鎌倉・六浦所在のやぐら群－」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
- 宗臺富貴子・宗臺秀明他 1998b「釜利谷やぐら群」「中世石窟遺構の調査II－鎌倉・六浦所在のやぐら群－」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
- 佐野大和 1968『瀬戸神社』
- 佐野大和 1986「六浦・平潟湾の歴史的景観－六浦港と瀬戸神社を中心に－」『歴史手帳』1986-14巻3号
- 上行寺東遺跡を考える会 1985『中世の六浦と上行寺東遺跡』
- 砂田佳弘 1987「泥牛庵脇やぐら群」神奈川県立埋蔵文化財センター・神奈川県土木部横浜治水事務所
- 竹内理三編 1991『角川日本地名大辞典』14 神奈川県 角川店
- 武部喜充・近江屋成陽他 1987「釜利谷やぐら遺跡」釜利谷やぐら遺跡調査団
- 田代郁夫 1986「中世墓地型態(やぐら)の考察－所謂「百八やぐら」の群分け－」『湘南考古学同好会々報』24 湘南考古学同好会
- 田代郁夫 1987「会下山西やぐら発掘調査報告書」二階堂会下やぐら群発掘調査団
- 田代郁夫・玉林美男・大三輪龍彦 1986「高徳院周辺遺跡(やぐら)発掘調査報告書」高徳院周辺遺跡(やぐら)発掘調査団
- 千々和到 1986「上行寺東遺跡と六浦」『歴史手帳』1986-14巻3号
- 長岡文紀 1988「泥牛庵脇やぐら群II」神奈川県立埋蔵文化財センター・神奈川県土木部横浜治水事務所
- 永井正憲・馬淵和雄・田代郁夫 1986『番場ヶ谷やぐら群発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 長谷川厚 2000「六浦三艘地区やぐら群」かながわ考古学財団調査報告99
- 長谷川厚・植山英史 2000「瀬戸町やぐら群・横穴墓」かながわ考古学財団調査報告86
- 長谷川厚・小川岳人 1999「釜利谷東6丁目西地区やぐら群・谷津町北地区横穴墓」かながわ考古学財団調査報告63
- 藤本正行 1986「上行寺東遺跡のやぐらと建物址」『歴史手帳』1986-14巻3号
- 前田元重 1986「中世六浦の古道－試論－」『三浦古文化』40 中世の六浦特集 三浦古文化研究会
- 三浦古文化研究会 1984『三浦古文化』35 瀬戸神社特集 三浦古文化研究会
- 宮坂淳一・鈴木庸一郎 2001「上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)」かながわ考古学財団調査報告124
- 山本暉久・中田 英 1983「横浜市中区本牧荒井地区発見の中世墓地調査報告」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』25